山梨県塩山市中萩原 重 郎 原 遺 跡

山梨県教育委員会

はじめのことば

塩山市の重郎原遺跡は、昭和37年2月塩山市中萩原の 芦沢治朗氏が、桃畠で苗木の植替作業中大量の縄文中期 の土器が出土したことにより発見された遺跡で、現在で は縄文中期の重要な遺跡として知られております。

この重郎原遺跡の発掘調査は、土地所有者である芦沢 治朗氏の通報で、県文化財調査員上野晴朗氏の緊急に発 掘調査をすべき遺跡である旨の現状調査結果報告により、 昭和37年6月1日から7月1日にかけ、上野晴朗氏の指 導により、山梨郷土研究会の会員及び県立図書館郷土資 料室の職員ならびに芦沢治朗氏の協力によって、調査が 行なわれました。

当時山梨県においては、このような発掘調査は前例がなく、また近年全国的に進展する開発事業によって、貴重な遺跡が破壊されるに及び、埋蔵文化財の保存対策が強く叫ばれ、また一般の埋蔵文化財にたいする理解と認識が高くなってきている現在とことなり、埋蔵文化財保護体制も整備されず、また発掘調査費も得られない状況下にあって、調査に参加された方々の献身的な努力により発掘調査し、出土品の復原整理にあたられたのであります。

前述の状況下であるため、上野調査員をはじめ関係者には多大のご迷惑をかけたまま、経過しましたが、今般その調査報告を出版するはこびとなりました。

重郎原遺跡の調査報告書を刊行するにあたり、発掘調査にあたられた上野晴朗氏をはじめ、調査にあたられた方々に、心から感謝申し上げるとともに、本書をご利用くださるようお願いし、刊行のことばといたします。

昭和47年3月20日

山梨県教育委員会

教育長 清 水 林 邑

目 次

1		は	じめに	. 7
2	. ;	遺	跡の位置	11
3		調	査の経過	13
4	. :	遺!	跡の概要	· 15
5	• 1	出:	土遺物	· 10
			土器	. 19
	a	. ;	第1群土器	. 19
			A 類	• 19
			B 類	• 20
			C類	.23
			D類	.23
	b		第 2 群土器	.25
			A 類	.25
			B類	•26
	c		第 3 群土器	•28
	d		第4群土器	. 29
	e		第 5 群土器	•34
			A 類	.35
			B類	.35
	f		土偶	•37
			石 器	
	a		打製石斧	.37
	b		石錐	.37
			石鏃	
	•		玦状耳飾	-
6			とめ	
			しょく	

挿 図 目 次

第1図	遺跡付近地形図	···1(
第2図	遺跡地点地勢図 ·····	12
第3図	竪穴住居址実測図	15
第4図	東側のAトレンチ	16
第 5 図	東側のAトレンチ (住居址に近い所)	16
第6図	西側のBトレンチ	16
第7図	土器実測図	22
第8図	土器実測図	24
第9図	土器実測図	27
第10図	土器実測図	30
第11図	土器実測図	32
第12図	土器実測図	
第13図	土器実測図	36
第14図	土偶実測図	37
第15図	石錐及び石鏃実測図	38
第16図	玦状耳飾実測図	38

図 版 目 次

図版 1	遺跡の遠≦	45
図版 2	遺跡の俯瞰	过图
図版 3	土器の出土	- 状況47
図版4	"	48
図版 5	"	49
図版 6	"	50
図版 7	"	51
図版 8	"	52
図版 9	"	53
図版10	"	54
図版11	"	55
図版12	"	56
図版13	竪穴住居均	- の全貌·······57
図版14	出土土器	第1群土器 A 類 ·······58
図版15	"	第1群土器 B類59
図版16	"	第1群土器 C・D類60
図版17	"	第 2 群土器 A · B 類 · · · · · · · 61
図版18	"	第 2 群土器 B類62
図版19	"	第 3 群土器63
図版20	"	第3~4群土器64
図版21	"	第 4 群土器65
図版22	"	第 4 群土器66
図版23	"	第5群土器 A・B類67
図版24	"	破片68
図版25	特殊遺物	十偶 耳飾り 石鏃

1.はじめに

昭和37年5月下旬のことであった。山梨県立図書館巡回文庫みどり号の係の榊原武夫君が、その日の巡回コースであった塩山方面から帰ってきて、「今日、塩山市の中萩原を通過したら、重郎原の芦沢治朗さんという人から呼びとめられて、2月の下旬に宅地続きの桃の畑の苗木を植えかえていたら、大量の土器にぶっかり、これは大変だと思ってそのあとすぐに県に調査依頼をした。ところが県から仁科調査員という方が見えられて、1時間ほど調査して帰られたが、その後まったく指示もなく、県からは報告もない。畑にはそのま、土器片が散乱しているし、春になって耕作に差しつかえて弱りはてている。なんとか再度調査してもらえないものか…」と、相談を受けたというのである。

この話がたまたま筆者のもとにもたらされたのは、筆者が榊原君と同じ県立図書館の郷土資料室に勤務していたからであって、筆者は早速、県社会教育課文化財係にその旨を伝え、その後遺跡の問題はどうなっているのかと訊ねた。すると当時の文化財係長が云うには「確かに3月頃、そんな調査依頼がありました。そこで県の埋蔵担当の文化財調査委員に調査を依頼しましたところ、先生は早速出張して見てきてくれました。そして、その日夕方課によられて「あれは縄文中期の遺跡だったが、内容はたいしたものではない」と云われて帰られましたので、たいしたものでないのなら別に報告の義務も指示も必要ないと思い、そのままにしておきました」という話である。

そこで筆者は、「しかし現に地主さんが放っておかれたのでは、桃の苗の植え変えも出来ず、春も進んでしまって困る…といっているのですよ」というと、係長は「それではあなたが改めて、もう一度見て来ていただけませんか」といわれる。

筆者はそのような訳で文化財調査委員が一度見てこられたという重郎原遺跡の調査にふとしたことから立入ることになった。

それから2・3日した5月26日(土曜日)の午後、筆者は郷土資料室の同僚だった清雲俊元氏が、たまたま塩山市藤木の放光寺の住職で、現地にも詳しく且つ芦沢治朗氏をいくらか識っているというので、同行を願い、急遽現地に向ったのである。

芦沢家に行き、現地を見せてもらうと、遺跡は一坪ほどにわたって大きな穴となり、ビニールが一応かけてあったが、周囲には土器片が散乱し、ビニールの下にも足の踏み場もないほどに土器が積重なった感じであった。芦沢氏は、「せっかく県に協力しようと思って遺跡の発見を届け出たのに、調査員が一寸見に来ただけで、あとどうして好いやら分らず、指示もないま、に5月も過ぎてしまうので、気が気ではなくなったので、みどり号にたのんだのだ…」といわれた。

土器片の散乱と、遺跡の周囲を観察すると、床面らしきところに変形の炉があり、その付近からおびただしく土器が出たが、それは発見時に興味をもってすっかり上げてしまったという。また、まだ積重なった土器片の上層の方は、2カ月の間に子供達が入って特ちさってしまったらしいという。しかし、土器の出土状況は炉を中心にして一軒分の竪穴から発見されたものの如くで、貴重な遺構として精査を必要とするものであった。なお芦沢家においては、貴重なもので県が調査するなら、土地をそのま、空けておいて協力してもよいが、あまりたいしたものではないというのであれば、明日にも桃の苗木を植えたい…と感想をのべられた。筆者は至急調査をする必要がある旨をのべて、その事柄を県に報告したのである。

その結果、県文化財係長は、国の方へはとりあえず電話で連絡するので、至急筆者に緊急調査をし

てほしいという依頼である。ただ注意すべきは、後書に詳述するように、県においては従来考古学上の調査費など計上したことはなく、いわんや緊急調査費なども、一度として調査を行なった実績がなかったのであるから、本調査をするに当っては、まずそこに重大な根本問題がひそんでいたのであって、この緊急調査がそのあと、難行に難行を重ねる行政上の問題点をすでに出発時からはらんでいたと云えよう。

その点では文化財調査委員の調査は、いわゆる「見てくる調査」として従来の慣習を守ったのであり、 緊急調査費ももたない県の調査のあり方をたまたま実践されたに過ぎない。

このような訳で、奇妙な縁で重郎原遺跡の緊急発掘調査という、かって前例のない調査を社会教育課の依頼により6月2日(土曜日)から行なうことになったのであるが、県の調査とはいつでも予算もなければ、また発掘の主体もないのであるから、筆者の勤務する県立図書館郷土資料室のメンバー3名と、山梨郷土研究会の二、三の方々の応援を得、もっぱら土曜、日曜を使って飛石式の発掘体制で、私的な形の奉仕による発掘日程を組んだのであった。しかしその後、3回目からは社会教育課の文化財係長、庶務係も応援に参加されるようになった。

このようにして約1カ月半、延日数では約10日間にわたって調査を続行した。その間には季節的にたまたま入梅に入るという悪条件があり、土・日しかどうしても奉仕できないメンバーは竪穴住居址の上にテントを張ってもらって、その中で調査を進めるという有様であった。

しかし、その間声沢治朗家においては、声沢氏を始めとして、長男欣吾氏、長女愛子氏らが発掘に協力してくれたばかりでなく、昼食の面倒から、お茶の差入れまで献身的に協力をたまわったのであり、その犠牲なくしてはこの発掘調査はまったく成り立たなかったのではないかと思われるほどで、まず最初に銘記して感謝の意を表わしたいと思う。

ともかくこうして、重郎原遺跡の竪穴住居址一軒分の緊急発掘は6月2日から7月1日の日曜日までかかって漸く終了した。 その間、竪穴内からは思いもかけぬ大量の土器片の出土があり、当初2、3日で終了すると思われたものが、重複して手もつけれないほどに重なった土器類に手を焼き、発掘は遅々として進まず、このように長びいたものである。

土器片はその後保管場所に窮する有様で、(県には全くこのような収納庫すらなかった)致し方なく、放光寺の清雲俊元氏の蔵を借用して一時保管していただいたものである。

ところが、その後が大変であって、前記の如く緊急の発掘調査費などまったく盛ったことのない県においては、調査とは「見てくるだけ」といった立前から、あとの土器の整理復元、できたら緊急でない本格発掘をやりたいという研究調査の在り方について、全く見向いてももらえず、筆者はとりあえず罫紙による緊急発掘結果を簡単に県に報告したのみにとどまった。ところが後で知ったのであるが、本緊急調査も、電話で最初国の保護委員会に連絡したのみで、その後文化財係長は事務上の手続きを 忘れ、筆者の罫紙による仮報告もそのまま握りつぶされるという有様であった。

そのような結果、清雲俊元氏の許に預けられた土器も宙に浮いたままで、年を越してしまうという 有様であった。

筆者はしかし、その後土器の復元問題、報告書作製問題、本格的発掘問題を文化財係長を通じて何回か働きかけてもらった。(調査の経過の項参照)文化財係長もそれなりに努力を図ってくれたが、結果はすべて暗礁に乗りあげるばかりであった。昭和37年、あるいは同38年における文化財調査委員会の席上においても、博物館建設が、かくてどうしても必要なのだという事を重郎原問題から説いたが、

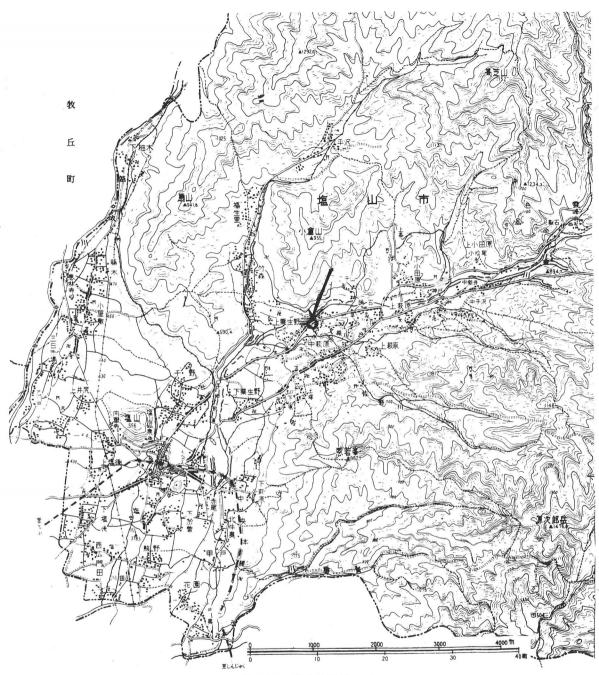
結果はまったく打開できなかったのである。

こうしていたずらに二年経過してしまったが、たまたま昭和39年4月、筆者が山梨県立図書館塩山 分館に赴任がきまり、現地にも近く、且つ図書館に空室もあったこととて、分館業務にも慣れた7月、 清雲俊元氏に依頼して今度は遺物を塩山分館に運んでもらい、とりあえず復元だけを行なうことになった。

こうして暇をみては独りでコツコツと復元に取り組んでみたが遅々としてはかどらず、悩んでいたところ、遺跡発見者の声沢治朗氏のお嬢さんである声沢愛子さんが復元を引きうけてくれることになり、それから約半年間この復元作業にたずさわってくれたのである。その結果、今見るごとく、ほとんど散乱して見る影もなかった土器片は、漸く立体的にその全貌を現わしたのであった。

かくて昭和40年の秋の文化祭には、塩山市でこの土器をはじめて公開、展覧に供した。また昭和41年の春にはこの土器を県が購入することになり、遺物の一切は県に保管された。その際筆者としては、今後の遺跡保存の問題上、遺物は出来たら現地に残して公開し、地元の為に残すべきと主張したが、ついにこれも聞き入れてもらえなかった。

しかし報告書はなんとしても出さなければならないのであるから、その後も交渉が進められ、昭和 46年の予算において、漸く陽の目を見ることになったものである。



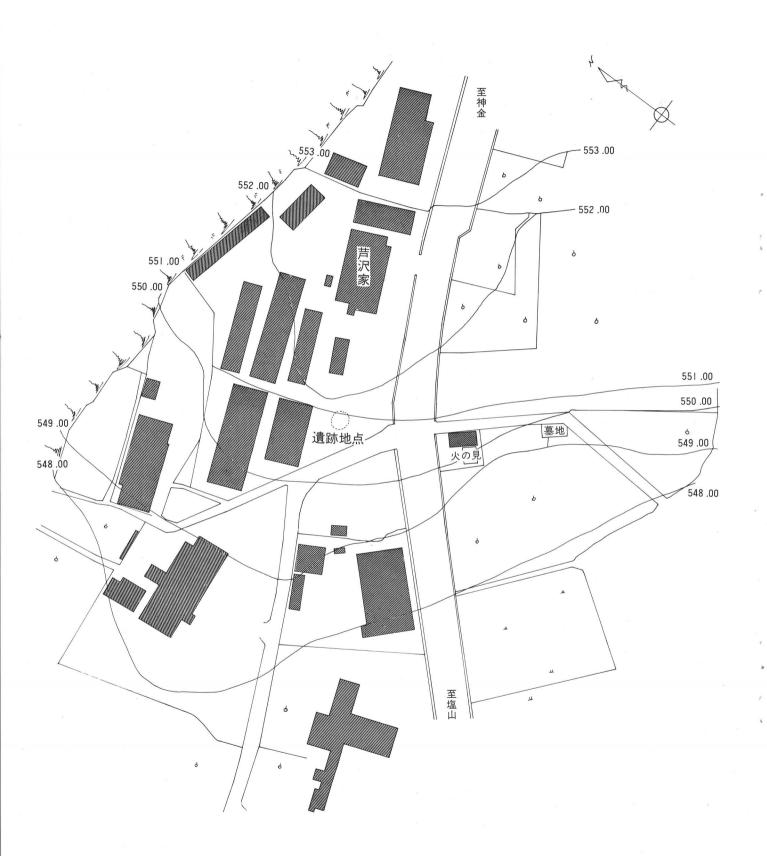
第1図 遺跡付近地形図

2. 遺跡の位置

山梨県塩山市中萩原重郎原は、地形的には第1図のごとく、甲府盆地の東部地区に属し、大菩薩嶺の山系から発する重川の流域にあり、遺跡地は塩山市中萩原1131番地、芦沢治朗家の屋敷内の一角にある。通称は大藤北原ともいい、一般的には重郎原で通っている。重川は上小田原、下小田原の右岸および上萩原が立地する左岸から発する幾つかの支谷を合せ呑み、その付近に発達する台地を流下して、中萩原、上粟生野周辺に至っては地勢が急に南西方向に緩傾斜し、台地は広闊な広がりをもつようになり、とくに中萩原においては、佐野川および文珠川が流下して遺跡の南方において重川に合流している。また上栗生野においては、さらに北方から流下する玉宮川が合流して、その付近にはそれぞれ発達した氾濫原が形成されている。また支谷は出口付近において浸蝕が著しく、それが重川の氾濫と重なって、とくに重川の左岸においては台地性格の強い地勢形成が見られる。

重郎原遺跡の北面は、小倉山およびその山系につながる二子山があり、重川は踊石付近から二子山および小倉山の山麓をあらって流下しているが、遺跡はその重川の左岸の縁(へり)にあたり、その川筋にそっては、旧青梅街道が裂石方面に向って走り、大菩薩嶺の方向に至っている。(図版1参照)遺跡地の地勢をさらに微細に見ると第2図のようであって、1131番地の西わずか50位付近において重川の崖渕となり、深い川底となる。また遺跡地の東側は県道にそって、旧河川が走った浸蝕線が見とめられ、この旧河川は東西に走っており、現在田畑ではあるが、この河川の窪みのため遺跡地付近の地勢は現河身と旧河川にはさまれて、東西方向に細長い帯状の丘陵性格が認められる。このような地勢は後に詳述するが、住居址の西わずか5位付近において河身の礫石が累積しているのが認められまた遺跡下1.5位付近においても、著しい礫層となり、この付近が重川の氾濫原として活発であった様相を示している。

またこの重川周辺の台地、山麓にはとくに縄文中期を中心とする遺跡がかなり濃密に分布しており 重郎原遺跡というのはその一つにあたる。



第2図 遺跡地点地勢図

3. 調査の経過

前記のようにこの遺跡は、はじめ声沢治朗家において、宅地内の桃畑の桃の木の植えかえを行なおうとして2月の下旬に古木の掘り起しを行ない発見したものである。その様子を聞くに、桃の苗木の植え変えであったので60紫程度の穴を掘ったところ、すぐにおびただしい土器片にぶつかり、数年前にも鳥小屋付近から珍らしい土偶が発見されたこととて(この土偶はすでに失なわれていた)家族が興味を覚え、少し掘りひろげてみたところ、石でかこんだ炉らしいものも現われたので、これはいけないと思い、途中で掘るのを止めにして、学術的に調査してもらった方が好いということになって、県に報告することになったのだという。従って床面が約4分の1壊われてしまっていたのは真にやむを得ないことであった。

しかしその後長いこと調査が放置されてしまっていたので、付近の子供達がその穴に入って土器片を掘ったり、持ち去ったり、また壁面とおぼしきところを踏み荒してしまったので、地貌は傷みほうけて惨憺たる有様であった。

このような中で、県から緊急調査の依頼を受けた県文化財調査委員上野晴朗は、県立図書館の清雲 俊元、同稲垣正幸氏等の協力を得て発掘体制をととのえ、下記日程の通り調査を行なったものである。 6月2日発掘前現状写真、表土排除

6月3日遺構検出、写真

6月9日同上 写真

6月10日同上 写真

6月16日遺物採集、発掘記録、写真

6月17日同上 同上

6月23日同十

実測、写真

6月24日同上

実測、写真

6月30日同上

実測、写真

7月1日整理

遺物運搬、報告

このように最後の日には塩山警察署におもむいて出土遺物について報告、すべてを終ったのであった。 以上の如く、この調査は調査費を持たない奉仕の事業となってしまったが、幸い前記の人々のほか 山梨郷土研究会の方から羽中田壮雄、野沢昌康、河内薫、県社会教育課から伊藤祖孝、楡井竣一氏等 の奉仕と援助をうけ、さらには芦沢治朗家の芦沢欣吾、同愛子氏らの温かい御援助と、測量機具は塩 山市西小学校から拝借して、かろうじて調査を続行し竪穴一軒分の調査を完了したのであった。

しかるに本調査はあくまで緊急調査であったので付近現状の精査は次にまたねばならなかった。とくに該遺跡地の西側と東側の一部がどうなっているかが問題で、とくに複合家屋の問題とか、土層断面の検出が全く行なわれないま、調査を中断するという事態に追い込まれてしまったのである。

そこで調査員としては、なんとか正式に調査費を盛ってもらって、緊急調査でない本格発掘が行なわれるよう強く希望したのであった。しかし県文化財調査委員の旅費日当はわずかに計上されていても、調査費まではとても無理であったその当時の現状としては「いかにしても発掘費などは無理です…」という、文化財係長の言葉に、暗澹として引き下がってきたのである。

せっかく前記のように、文化財調査委員が旅費だけもらってのいわゆる『見てくる調査』が、仁科

調査委員の場合のように、いかに危険なものであるかを露呈したのであるから、せめてこの際、みんなが私的に奉仕しているこの姿を見て、緊急調査と本格調査の意義を闡明して欲しいと再三願ったのであるけれども、如何んともならなかった。

このような経験は、すでに日下部遺跡の調査において、味わいつくしており、県が主体性をもって 行なう調査の意味がどうしても理解してもらえなかったのであるけれども、その伝統は昭和37年の時 点においても全く変らなかったのである。

しかし、それはともかくとしても、出土したおびただしい数の土器片の処置、復元費の問題など、 当面すぐ必要とするむずかしい問題をかかえて、関係者一同は頭をかかえてしまった。

しかし断っておかねばならないが、これはひとり文化財係長が悪いのではない。すべては県全般の文化行政の、その当時の致命的な遅れと意識の低さから影響してきた事柄である。ともあれ、この場合文化財係長はむしろ自ら発掘に奉仕してくれたし、予算問題ではかなり奔走してくれたのである。

これは後日のことに含まれる内容であるが、とくに9月の補整予算には重郎原遺跡の発掘調査費、 家屋復元費、遺物整理費などを一応要求してくれた。さらに昭和38年度の新年度予算の編成期にも、 この事業費を計上したことを聞かされた。しかし、ともに一次査定で問題なく抹消されてしまったと いう。

このように、重郎原遺跡は後述するように大変貴重なものであったにもかかわらず、県からは全く問題とされず、それまで、せめて住居址をそのま、にして、できたら復元もと考えていた調査者は、まったく打開の道を断たれ、隘路に踏みこんでしまって失意の底に落入ってしまったのである。

しかし一方では、芦沢治朗氏から「住居址が復元できないのなら、いつまでも土地をあけておくのは困る」という申入れもあり、予算の見通しのまったく立たない現状の中で再三悩んだけれども、「もはや、これまで」と判断を下すにいたり、12月上旬に清雲俊元氏と上野が遺跡におもむいて、完全なる埋戻しを行なった。

またこれよりさき、7月1日の発掘調査終了時点において、あとの調査予定がまったく立たないと 文化財係長から聞かされて、窮地に立った調査者は、住居址の周りの探索のためにどうしても本格調 査が必要であったから7月9日付で、埋蔵文化財発掘届を文部省文化財保護委員会宛に提出した。こ の時の調査は「おとがき」に詳述したように、たまたま日本大学第三学園教諭の上川名 昭氏が、演 習のため、第三高校の生徒数十名を連れて発掘費自弁にて参加し、応援したいと申込みがあり、それ を受入れたものであった。

山梨県の埋蔵文化財に重大な関心をもつ調査者としては、できたら県を主体にする発掘体制と、地元高校生・中学生などの参加を得てどんなにか本格調査をやりたかったのであるが、緊急調査においてあれだけ貴重かつ優秀な遺跡が発見されたにもかかわらず、結局本格的な調査は県からは一顧だにされず、万止むを得ず、日大三高の応援を得るという形になってしまった。

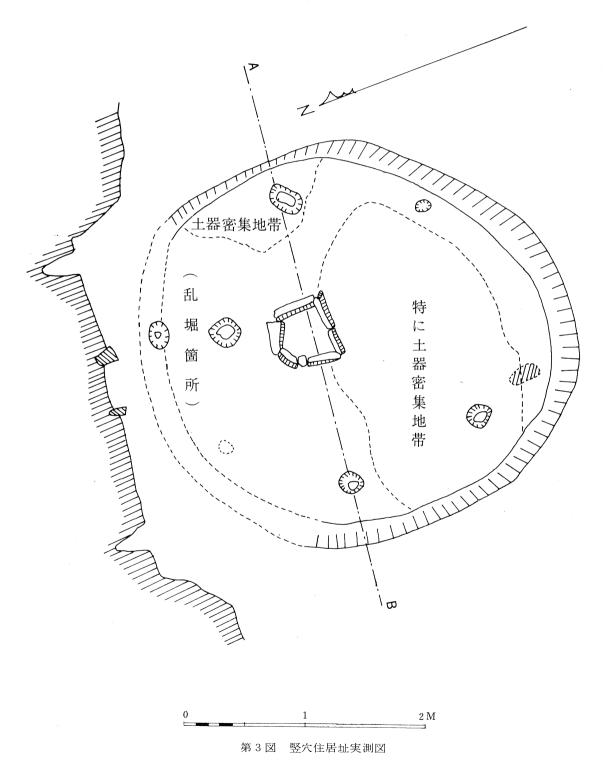
いずれにしてもこの調査は、8月14日から20日までの予定ということで始めた。但し緊急調査において発見された中萩原1131番地の調査というのは僅かに2日間であった。

- 8月14日 正式発掘による土層断面検出
- 8月15日 同上
- 8月16日 上川名氏による発掘は中萩原1080番地に移動、重郎原遺跡の調査終る。

以上の如くで、全くかろうじて周囲の土層断面検出を行なったのが勢一杯であった。

4. 遺跡の概要

本遺跡は、縄文中期中葉の竪穴住居址であって、他に複合するところのない単純遺跡であった。遺跡発見時に、芦沢氏により地表下平均40cm前後まで掘込んでおり、とくに第3図に見られる如く、炉から北側の側壁近くまでを60cm以上にわたって掘り込み、土器片はすべて上げてしまっていたので(図版3参照)住居址全般の約5分の1は竪穴内が攪乱されてしまっていた。しかし第3図の如く炉の中



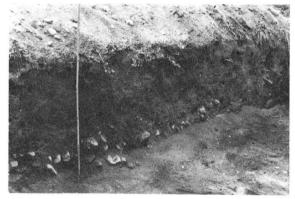
心線A-Bから以南は、そのま、の保存状態がほぼ保たれ、上層は多少攪乱されていたけれども、下層はまったく元のま、の如くであった。

よって発掘の当初に当っては、遺構の全体確認のため、まず側壁の現状確認と、土器の散乱した範囲を清掃整理して、横たわっている土器の周りの土を多少剝離して様子を眺めてみた。その結果が図版2~4の如くで、炉を中心にした一軒の竪穴であり、土器類はいずれも横たわって、不規則に重なりあい、その深さはほぼ竪穴の深さと同じく40cmくらいの厚みに重なっていた。また土圧によってどの土器も平らに押しひしげられ、無数のヒビ割れとなり、また一つの個体がバラバラのものも多かったが、概して下層の床面近い土器は完全に近い個体を有していた。さらに側壁に近い土器は竪穴に向ってたれ込んだような姿に見られた。側壁の外の様相は土器片はあまりなく、図版2の如く若干の打製石斧があったのみである。

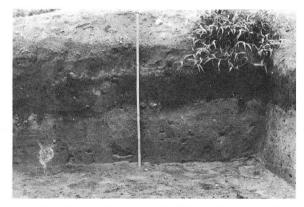
なお芦沢治朗氏が発見時に掘り上げた炉址の北側の床面の土器は、ほゞ図版から想像すると、南側と同様床面一杯に散乱していたものの如くである。ただし炉址の上にまで土器が重なりあっていたか否やは、まったく不明である。

遺跡地の原点標高は551m、そのすぐ西を流れる重川の河床までは約15mの差がある。遺跡地は重川にそって西南下がりの緩傾斜地であるが、氾濫原の上にありながら耕作土は好くこえた、この付近で黒野土と呼ばれる土層から成り、この層が約30cm前後続いて、その下に40cm前後の黄褐色の砂質土壌が続いている。

この土層変化と区域を微細に見ると、挿図写真第 4-6 図の如くである。即ち、竪穴住居址の東西に幅1.5m、深さ約1.3m、長さ12mにわたってトレンチを設定してみたところ、まず東側のトレンチA



第4図東側のAトレンチ



第5図東側のAトレンチ(住居址に近いところ)



第6図西側のBトレンチ (西方から東を見る)

は、表土下30cm前後は耕作土で、その下17~20cm前後に純粋の黒色土層があり、その下に約35~45cm にわたって黄褐色の砂質土壌が続いている。さらにその下は非常に砂気の多い小礫石の層に至っている。このうち土器の包含層は第二層目の黒色土層に多く含まれており、第三層の黄褐色土層、第四層の小礫石層にはまったく見当らない。また住居址との関係を検討すると、住居址は第三層の黄褐色土層に掘り込まれており、従って床面の一部(図版12参照) は、第四層の小礫石層にぶつかっているところが見られる。

次に西側のトレンチを見ると、挿図写真4~6のごとく、住居址の側壁から3m位までは東側とほぼ同様の土層が続いていたが、しかし住居址から西へ4m位離れると、第一層の耕作土の下に東側の第四層に当る礫石の層がすぐ続いてきてしまっている。しかもその礫層は東側に較べて石は大ぶりとなり、且つ緻密になって、明らかに重川の河床がすぐ側にあったことを示していた。

また注意すべきは、第三層の黄褐色土層で、いわゆるローム層ではない。即ちこの黄褐色土層は重川特有の花崗岩の深層風化によるもので、黄褐色が強いが、この土層の中には長石、石英、雲母などが多く浸入した砂質の強い土層である。またなおよく微細に見ると、A・Bトレンチ間に、住居址をはさんで約10mの横幅でこの層が特に著しい帯状を成している様子が窺え、いわゆる縄文中期の時代に、旧河川の上に東西に長い帯の層が続いている上に住居が設定されたらしい様子を示している。

次に住居址であるが、竪穴は側壁の検出がきわめて不鮮明で、黄褐色土層に黒色土層が喰い込んだ 関係からその状況を区別出来るのみである。床面は攪乱をまぬがれた南側から見ると、わずかに踏み 固められた層があったが全面ではなく、土器片は床直上のものも、また床面下に明らかに喰い込んだ ものもあり、図版12~13のように小礫石層の下にまで喰い込んだのも見られた。周溝の検出はまった く不明であった。

次に竪穴の大きさについて見ると、東西の径が2.60m、南北の径2.80mで、ほぼ円形ではあるが、図版13の如くや、南側において角ばったところも見られる。柱穴は確実なもの五本を数え、不明瞭なもの一本があった。柱穴の大きさは、幅20cm、深さ30cmのものが最大で、概して柱穴は小さく、内部も固まった箇所が少なかった。なお炉の北東に、幅35cm、深さ7cmほどの貯蔵穴らしき遺構も認められた。

炉はや、北に偏していると思われ、安山岩質の7個の自然石をもってやや変形に組立てている。最大径は60cm、焼土の深さ11cmである。側壁の深さは東側において45cm、西側はや、だれており25cmの深さで上部は不鮮明となる。床面は踏み固めたところも認められたが全般に黄褐色土層に対して黒色土が混じり合った感じで、特に北東の隅は第4層の小礫石層が風化してザラザラした床面であった。また床面はむしろやわらかい感じであった。

土器および石器の出土状況は、図版1~3に見られるように約50cmの厚みの中に二層三層に累々と 折重なった感じである。また側壁に近い土器は図版3のように、たれ込んだ形に埋存していた。また 床面直上の土器は図版6のようにほず完形に近いものばかりで、復元の結果もそれを裏付けていた。 打製石斧は竪穴外にも数個あったが、すべてこの土器類の間に混入しており、図版25~のドリル及び 玦状耳飾りは、炉の南側の床面に近く土器の下敷きとなっていた。

住居址は複合の様子は認められず、Aトレンチ側の北隅に黒色土層があって、第二次の発掘において土器片が若干出土しているが、本住居址の東側壁から2m位離れており、直接には本住居址とは関係が認められない。

周辺遺跡との関係は、西側は礫石の層が厚く、地表近くまで砂礫が認められるので、これ以上の濃密な住居址の分布は考えられないが、本住居址を中心にして東方に伸びる島状の黄褐色土層の帯にそって、縄文中期を中心とする遺跡分布が考えられる。

5. 出土遺物

住居址内から発見された遺物は、土器と石器、および装飾品で、自然遺物その他は認められなかった。土器類は一軒分の竪穴としては驚くほど豊富、多量であり、且つバラエティに富んでいた。しかも出土状況から見て、ほぼ単純遺跡と思われ、フンドと見なして差しつかえないと思う。土器の分類から見ても同一型式でセットとして甚だ個性的である。その点山梨県の標式として真に貴重なものである。

土器

本竪穴内の土器は、復元の結果や、完形に近い土器29個、胴部および底部によって器体の明らかななもの9個を数えることが出来る。そのほか小破片等多数あるが、一応器体の明らかなものによって、 土器製作の技法上の分類を行なってみると、まず5群に大まかに分類が可能である。

a. 第1群土器

土器装飾において、非常に原始美豊かな文様が見られる一群で、とくに剛直な隆起線文や彫刻文を豪華にあしらって、器体全体(口縁から底部にいたる)を抽象画風に飾っている土器である。器形は、多くは口縁部が膨隆し、口唇部で内曲するが、中には小数であるが外反したままのものもある。本群はまたその技法上からA~D類に分類される。

Α類

(1) 挿図第7図・図版14の1

本器は炉のすぐかたわら、東南の床面直上から出土した。土器類全般の中で一番原始美あふれる土器である。高さは55.5cm、底17cm、口径40.5cm、器厚は平均1.2cmである。本器は甕形であるが頸部までは筒形で、口縁部に至って外反し、素文の口縁部は著しく肥厚して、口唇部にさらに隆帯を附して、その引き伸ばした隆帯に四個の耳型突起が把手となってついている。頸部には相似形長楕円文が窓のように五個区画され、区画帯は半截竹管による半隆起文を附し、その外側にはり付による縄文をなった感じの隆起帯を区画して、その隆帯には連続刻目文を施文している。また長楕円文の中は櫛状器具による縦の条線による沈線文を附している。頸部から下の胴部全体には縦位の文様帯が集約してつけられ胴部には又や、左向きのボタン状突起がっき、驚くほどのバラエテイに富んだ文様効果をあげている。そして強調する文様はすべて隆線によって形作られている。隆線による文様は半截した竹管等で深く刻まれており、その外側にとくに隆起する盛りあげによる隆起帯には、刻目文、連続爪形文等がつけられ、様々の形の区画内には幅広の沈線文が主調となって引かれ、またこの中には浅い無造作な条線文が縦横に引かれたものもある。また隆起帯に箆状工具による綾杉文的な刻目や、交互沈刻文も見られる。またしばしばS字形の隆線と渦文が見られる。また区画内沈線文にそって、竹の切口を軽く突き刺した感じの小円刺突文が連続して見られるところがある。

本器の胴部の文様効果は、微細に見ると以上の如くであるが、なお大きく分けると、胴部の文様は 縦位ではりつけた隆起帯による胴部の菱形の図文二区画と、さらに象形化した渦巻、あるいは連続す る区画を複雑に組み合せた象形文の二つの文様区とが相対的に配され主調となっている。焼成は全般 に堅緻で、色は赤褐色を呈し、赤色の方が強い。胎土には雲母、長石等の混入が多量に見られる。

(2) 図版14の2

本器は甕形で下部を欠損するが、現在の大きさは口径42cm、高さ51cm、器厚は1.1cmである。胴部は筒形であったと思われ、頸部から急に外反し、口縁部は朝顔形に外反したま、である。口唇部は肥厚し、隆起帯となって一種の玉ぶちに作られている。また一部に渦状又はボタン状の突起を装飾している。口縁部には頸部との境まで(1)と同じ技法をもつ、相似形の長楕円文(区画内は、長矩形に見えるところもある)がつけられ、これらは、盛りあげの隆起帯によって区画され、隆起帯はまた一方を繩をなった如く表現し、また隆線の接合部には渦巻による装飾突起をつけている。また縦に交互沈刻文がつけられている。頸部と胴部との接合点には無文帯をあしらい、胴部には(1)と同じく器面いっぱいに縦位の文様をつける。隆起文は、盛りあげによるものと、箆状工具による半隆起帯とから組合わされ盛りあげの隆起帯は頸部から垂下して渦文となり、その背に連続の刻目文が施文されている。区画内は単純な沈線文が縦横並行して走り、文様効果は(1)に比して単純である。焼成は灰褐色を呈しており器面は箆で磨いたあとが見られる。雲母の混入が多量である。

(3) 挿図第7図、図版14の3

本器は円筒形の深鉢形土器である。大きさは高さ24.5cm、底10.7cm、口径12.5cm、器厚は平均7mmでわりに小形の土器といえよう。図版11、No.21の写真に見られるように、炉の近くに(1)と並んで床面に接触して出土した。

器は、頸部から口縁にかけて極端に丸く膨隆し、口唇に至って内彎するが、さらに口唇に一条の「くの字」形の稜をつけている。この丸みをおびて彎曲する口縁はすべて素文で、整形研磨され文様は胴部に集約され、底部の接合点から又素文となって、器体は底部でや、外反し、さらに内曲して底をまとめている。しかし本遺跡共通の底部に「くの字」形の極端に見られるのとは、やや技法を異にする。胴部の文様は、盛りあげによる隆起文と、半截竹管によって隆起化した並行沈線文帯で縦位に区側をつくり、その中をななめ横に箆状工具による沈線文で満たしている。盛りあげによる隆起帯は、二本は対象的に頸部との境から垂下し、下のまとめは半渦文となる。その間の一本は上部で小形の円文にまとめて直線に垂れ下げている。いずれも隆起には連続刻目文がつけられ、中には綾杉文化した刻目文も見られる。半截竹管で引いた低い隆線は、盛りあげの隆起帯をはさんで、左右二条でつ垂れ下げているが、そのため半渦文のところは五重弧文になってみえる。焼成はや、もろく、茶褐色であるが、部分的に黒味がかったところが見られる。雲母の混入がはなはだ多い。

B類

(4) 挿図第7図、図版15の4

本器は大形の甕で、図版5のNo.10にその出土状況が眺められる。器は高さ45cm、底17cm、口径約31cm、器厚は平均1.2cmと厚い。底部がや、末広がりとなり、さらに内曲して「くの字」形にしばまる勝坂式に多く見られる器底である。立上りは胴部および頸部へかけて広がりを見せ、口縁部に至って急に膨隆するが、口唇にいたり急に内彎して、いわゆるキャリパー形を呈する。口縁の加飾は左右対象的と思われる山形の把手がつき、さらに対象的なやや小さい左向き耳形の把手がつく。器面全体の文様帯は、口縁装飾も含めて横位の四段構成である。このうち口縁装飾帯は把手にそれぞれ連結する山形、もしくは渦文の曲線が盛りあげられ、曲線の隆線上には(2)の一部に見られるような交互沈刻文が

鋭くつけられている。また連続する爪形文、刻目文が見られる。胴部三段の隆起帯はや、退化し、断面三角になったものが多く、それぞれ四個の大きな楕円文によって交互に区画し、内部は縦の沈線文をもって充填するものと、又交互入組の幅広の沈刻文にて縦に飾ったものとある。沈線文には又、細帯にそって横の刻目文が連続についているものがある。焼成は普通で、茶褐色を呈するが、底部と口縁ではかなり焼成の色が異なってみえる。

(5) 挿図第8図、図版15の5

本器は大形甕で、図版 9 のNo.17にその出土状況が見られる。高さ61.5cm、底15cm、口造り35cmを計測でき、器厚は平均 1 cmである。器形は(4)とよく似ているが、胴部は前者に比してや、ずん胴で、(4)の如く底部に近いところがとくに引きしまった感じがない。

文様帯も一見(4)に似ているが、口縁、頸部を含めると横位五段構成で、頸部の帯はまったく素文である。なお(4)と著しい違いは、頸部から下の隆起帯に右傾の縄文が加飾されていることである。口縁装飾の山形の把手はや、大きく、現在一個しかないが、相対的についていたものの如くである。口縁の曲線を示す隆帯には、刻目列があり、なお一部には交互沈刻文となったところが見られる。また胴部の隆線による区画は(4)の如く規則正しいものではなく、長楕円文、長矩形を基調とし、その変形から成り、内部には櫛目状の工具でつけた縦の沈線文が充填してあるが、その沈線は長く荒い感じである。焼成は(4)とほゞ同じで、ともに雲母、長石の混入が見られる。

(6) 図版15の6

本器は中形の深鉢形土器で、欠損が大きいが現高は17cm、口径は約18cmほどあると思える。器厚は平均1cmである。

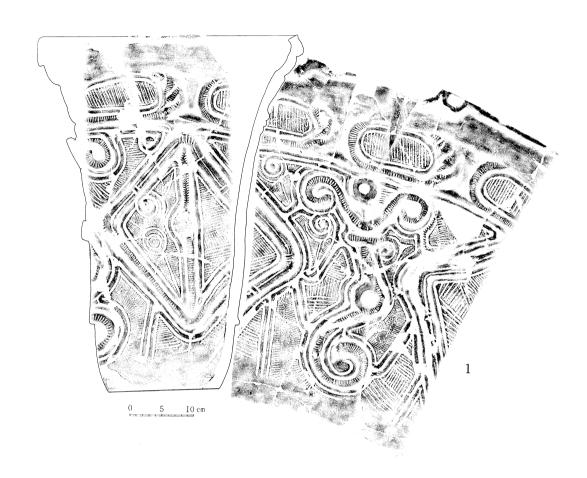
文様は口縁から胴部の一部のみで全体を推し計れないが、技法的には(4)(5)と同類と考えられる。口縁は膨隆するが、口唇で内彎し、隆起帯をまとめて山形の把手を構成し、その隆線の上には刻目文および交互沈刻文をつけている。頸部から以下には相似の楕円文を断面三角の隆起の中に区画し、内部には沈線文を縦位につける。楕円文の右側につけた、紐をなった感じの隆起の技法は、(1)(2)および(8)にも見とめられる。

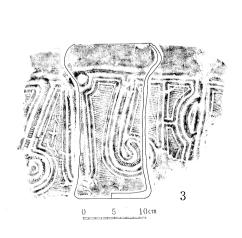
(7) 挿図第8図 図版15の7

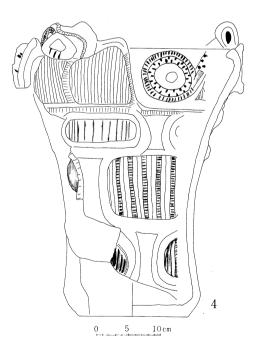
本器は底部のみであるが、底の大きさ12.7cm、現高14.7cm、焼成はや、もろく、赤褐色が非常に強い。底部が張って「くの字」形に曲った典型的な勝坂式の底部をしており、胴部との継目には一条の凸帯がある。文様帯は(4)(5)と同様に何段かの構成であったと思われ、隆帯には整然とした刻目列をつけ、長楕円形の窓の中には無造作に縦位の沈線文を加飾している。長石の混入が著しい。

(8) 図版15の8

本器は下半分以上を失なっているけれども(5)および(6)に近似して、深鉢形土器である。大きさは現高23.5cm、口径28cm、器厚は平均8mmである。膨隆した口縁には文様はなく、(3)と同様に口唇に「くの字」形の稜がつき、左右対象的と考えられる橋形の把手がついたものの如くである。頸部の楕円文の装飾は、技法的に(6)と同じであり、頸部と胴部の接合点に横に走る降帯には爪形文が加飾され一部







第 7 図

に交互沈刻文が見られる。胴部の加飾は隆起線を曲線、又は直線に入り組ませ、隆線の上には刻目文 爪形文を附し、区画内は珍らしく素文である。これと同じ表現は、(12)の甕形に顕著に見られる。焼成 は堅緻であり、褐色が強い。

(9) 図版16の9

深鉢形の口縁部の一部であるが、口唇に山形の把手をつけ、内部を沈線で埋め、頸部がとくに膨隆して、口縁との境に稜が生まれた如くに見える。楕円文は(6)と技法的には同じであるが、著しく外曲したその曲線に文様を附しているのは前者とは異なっている。

(10) 図版16の10

本器は底の一部であるが、底部の大きさ15cm、(7)と形態および技法が似ているけれども、楕円文の中が幅広の交互半隆線文で充塡している点は他と異なる。又、隆起は断面三角で胎土に長石が多い。

(11) 図版16の11

口縁の一部であるが(9)と同じ器形で、口縁は素文が多く、頸部が著しく外曲して、下の境目には並行する隆線を配し、その間に複雑な隆起の曲線により変形楕円文、三角文、渦文を組合せ、区画内は沈線文で埋め、隆帯には交互沈刻文と刻目文があしらわれている。焼成は普通、長石の混入が多い。

C類

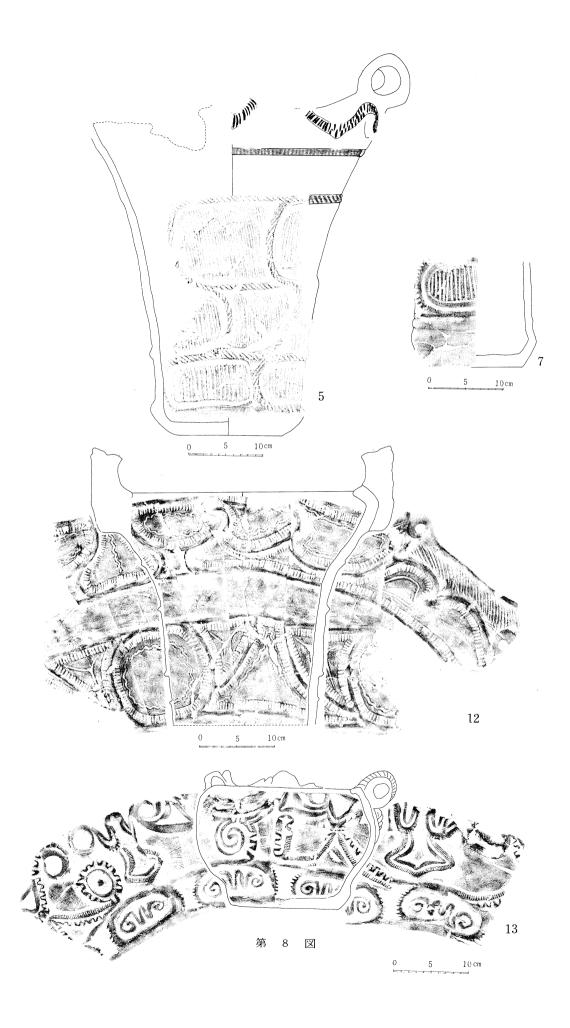
(12) 挿図第8図、図版16の12

本器は甕形で、底部を全く欠損しているが、現在の大きさは高さが31.3cm、胴部の欠損箇所にて19 cm、口径30.4cm、器厚は1cm平均である。胴部と底部は、輪積みの接合からきれいに割れており、胴部は円筒形であるが、しかし胴部の中ほどから立上がりが外反し、口縁部に至って著しく膨隆、そのま、立上っている。口唇だけはしかしや、内彎する。隆線によって縁どり、相対する山形の把手はやや退化した感じで、さらに相対的に簡単な渦巻状の突起を附している。山形の把手から垂れ下る隆線の曲線文は、三角断面をなし渦状となって区画帯をつくり土器全体としては四段構成であるが、頸部の下に一条素文帯がある。胴下の段の区画帯は、二条の横線の間に曲線あるいは直線により、交互に組合わされた楕円文、三角文、あるいはその変形した区画をつくり上げている。この器の技法としては、隆線が口縁部に特色ある山形の把手をつけているが、それは隆線を引き伸ばして作ったものである。胴部全体の隆線は、や、断面三角であり、隆線の区画内には刻目文、爪形文が附され、さらにその内側に沈線の波状文、あるいはY字形の沈刻文が加飾してある。なお口縁の一部には区画内に条線の沈線文も見られる。以上のように本器は(1)~(11)までに見られる土器と技法的にはかなり異色であり、且つ阿玉台的な匂いの一番強い土器である。胎土には雲母の混入が誠に著しい。

D類

(13) 挿図第8図、図版16の13

本器の出土状況は、図版 $4 \sim 5$ に見られる。浅鉢形の土器で、高さ24cm、底13.5cm、口径16.5cm、器厚は 7 mm前後、焼成は赤褐色、非常に堅緻である。底部は胴部との接合点が台付土器で、カップ状のような感じとなり、極端にくびれている。底はや、欠損しているが、外反から急に「くの字」形に



内彎する姿で、本遺跡の一般的傾向と一致している。胴部から口縁へかけては膨隆して、口唇に至って内彎し、ここには「くの字」形の稜が見られる。

器面装飾は、全体に彫刻的文様帯としてつけられ、口縁の把手は山形ばかりでなく、小突起を併用して、非常に自由闊達である。胴部を流れ下る隆起文は多くの曲線となって、あるものは渦文をつくり、あるものは変形菱文のような区画帯をつくる。隆線には連続爪形文を附す場合と、波状、もしくは山形の沈刻文を多用している。底部に近い文様は、相似性の四個の楕円文を彫刻的隆起で区画しており、これは(4)(7)(10)などの技法的近似性が認められるけれども、しかし(10)とはまた違って内部の充塡は条線の沈線文ではなくて、唐草文の如き左右に渦巻を配した隆起文を彫刻しており、全般に器面を箆で自由に彫刻し、あるいは彫整して、箆状施文具による技法が目立っている。

b. 第2群土器

本土器群は、口縁または肩部に、隆線による文様帯をつける点では第一群と異ならないが、その隆線による文様帯は土器の上体にのみ置かれ、胴部にはすべて縄文が加飾されている土器群をさす。この縄文による胴部の加飾は第1群には全く認められないもので、第1群の縄文は技法的にわずかに図版15の5の隆起帯にあるのみである。しかし第2群においては、この縄文が器体の下半分をおおい、また本竪穴内ではこの第2群土器が一番多量に出土した。

さらに、本土器群は、下半分の縄文帯は同じようであるが、口縁又は肩部の装飾が、第1群に多く 見られる楕円文の窓の区剛を相対的につけ、その中を沈線文によって充塡するタイプであり、さらに この装飾が口縁直下に加飾されるタイプと、又やや下がって頸部と考えられるところに加飾するタイ プに分けることが出来る。

よって、この分類では前者をA類後者をB類と細区分する。

Α類

(14) 挿図第9図、図版17の14

本器は深鉢形土器で、図版7のNo.14にその出土状況が見られる。炉から見て北東の一群の中にあり出土状況はや、たれ込んだ形をしている。器の大きさは高さ32cm、底は小さくまとめられて9cm、口径21.5cm、器厚は平均8mmほどである。器形は胴部が極端に引きしめられて、口縁と底部が膨隆し、口唇は急に内曲して「くの字」に内彎する。口唇には又、双方に把手がついていたが欠損している。また把手から隆起帯のすえが口縁を流れて渦状の突起も加飾されている。口縁下の楕円文の手法は相対的に四個をつけ、相対する二個の楕円文の下には隆起をまとめて胴下に垂れ下げさせ、末尾を大きくわるび手にまとめている。しかもこの隆起帯は、刻目文あるいは無文のま、対象的に変化をもたせている。また刻目文とともに交互沈刻文が多用されている。縄文は胴部全体につけられ、底部には彎曲部にわずかに無文をのこすのみである。焼成は堅緻であって暗茶褐色を呈しており、雲母及び長石の混入が多く見られる。

(15) 挿図第9図、図版17の15

本器も深鉢形であって、(14)に器形は近似するも、手法はやや異なるものがある。大きさは高さ32.6 cm、底11cm、口径24cm、器厚 9 mm平均で、焼成は堅緻である。技法的に(14)との大きな相違は、頸部と胴部との接合点に横に二条の隆起帯をつけて、その間を素文とし、胴部は繩文のみで隆起帯は垂下さ

せていない。又口縁装飾はつけていないようである。楕円文の区画の隆起帯には刻目列をつけ、さらに交互沈刻文を上下につけている。隆起帯の繩をなった加飾技法は(14)にも見られるが、第1群の(1)(2) (6)(8)等にそれぞれ見られる。長石、雲母の混入が著しい。

(16) 挿図第9図、図版17の16

本器も深鉢形であり、出土状況は図版3のNo.6に見られる。器の大きさは高さ26.5cm、底10.2cm、口径18cm、器厚は1cm平均である。器形は(14)(15)と同型といえるが、やや寸づまりである。もっとも山形の把手がついていたが欠損しており、別に小形の山形の突起がついている。口縁のすぐ下に長楕円文をつけるのは前者と変らないが、把手からまとめられた隆起の流れを楕円文の端でまとめて円形文を作っている。これは他の器の楕円文には見られぬところである。この隆帯には刻目文と交互沈刻文が見られる。胴部には隆起が垂れ下がっておらず、すべて縄文帯である。焼成は普通で、雲母、長石の混入が多く見られる。

B類

(17) 挿図第9図、図版17の17

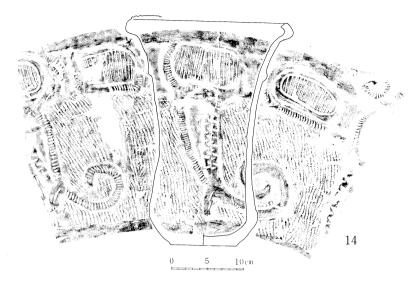
本器も深鉢形であって、出土状況は図版 8 のNo.15に見られる。器の大きさは高さ31.8cm、底12cm、口径24cm、器厚は 1 cm平均である。焼成はや、もろく、暗褐色を呈している。器形として底部の広がりはあまり見られず、わずかに縄文が消える末に彎曲の丸味が見られる。口縁部も胴部から漸時広がりを見せて立上り、口唇部はいわゆるキャリパー形に内彎する。この形は A 類とはかなり異なっている。口縁部は広い範囲にわたって素文であり、把手も突起もなく、頸部に四個の楕円文をつけ、内部を縦位の条線文で充塡するが、しかし区画をつくる隆起は退化しており、爪形文も、刻目列もまったく認められない。胴部は全面に縄文をつけ、綺麗な左傾縄文が見られる。胎土には図版に現われるほど、多量の雲母の混入が見られる。

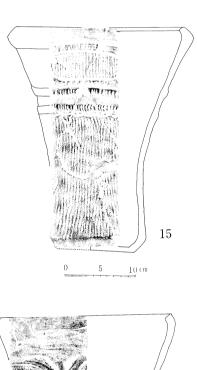
(18) 挿図第9図、図版18の18

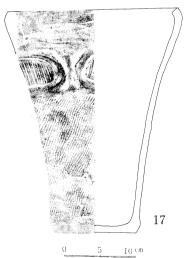
本器は深鉢形土器で、出土状況は図版 7 のNo.14に認められる。器の大きさは、高さ36.5cm、底13.3 cm、口径24cm、器厚は平均 8 mmである。底部は末広がりから内彎し、この形式に普遍的なもので、胴部から口縁への立上りは(I7)に酷似し、口縁のまとめ方も内彎するキャリパー形である。しかし(I7)と違って口唇にわずかに山形の把手があったもののようで、楕円文をかこむ隆起帯も(I4)~(I6)に似て高く、胴部との接点の隆起帯には紐の流れをまとめて耳状の突起を装飾としてつけている。さらに一条胴部に向って隆起帯を下げており、(I4)と同様に末端をや、軽く丸めている。隆帯の上には刻目列が見られる。縄文は左傾する縄文で胴部いっぱい加飾している。焼成はや、もろく、暗褐色を呈し、多量の雲母、長石を含んでいる。

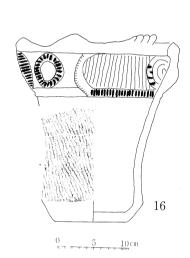
(19) 図版18の19

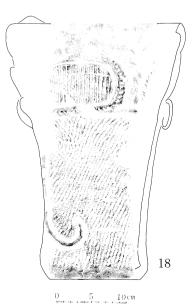
本器は部分的にしか残されていないが、深鉢形の土器である。口径24cm、現高24.5cm、器厚平均1 cmである。焼成は堅緻で褐色を呈し、口縁はとくに箆で調整し磨いた如くである。本器の特色は素文の口縁が二段構造で、下段は頸部からとくに膨隆させて外側を彎曲して丸め、上段の口縁はや、開き











気味に立上らせて、把手、突起等全くつけない平縁としている。頸部の楕円文は前出の器体とほぼ同じ手法で整然としている。胴部はすべて縄文によって加飾している。胎土には雲母の混入が見られる。

(20) 挿図第10図、図版18の20

本器は深鉢形というよりも、もはや甕に近い土器である。出土状況は図版3のNo.6に見られる。器体の大きさは、高さ41cm、底14.5cm、口径30cm、器厚、平均1cmである。器形は(17)(18)等と近似するが口縁に板状の山形把手を四個つけている。そして、その山形から垂直に下げている隆起線は楕円文につながり、又肩部に渦文をつくっている。隆起帯の背には刻目文交互沈刻文を丹念に連続してつけている。把手の技法は口縁の隆線を引きのばしてつくる形であり、阿玉台式に多い。焼成は普通で暗褐色を呈し、雲母の混入が多い。

(21) 挿図第10図、図版18の21

本器も深鉢形であるが、甕形といった方が至当かもしれない。器の大きさは高さ43.7cm、底15.5cm 口径24.4cm器厚平均1cmである。本器の形もまた、200と同じように、口縁装飾以下の形は(17)(18)に近似し、キャリパー形に内彎している。しかし著しい相異は口縁装飾で、一部しか残されていないが、この内彎する頸部の上に華麗な口縁装飾帯をめぐらせている。(第10図参照)この姿はB類の一般的姿ではないが、しかし(20)(21)は主要な文様帯が器体上部に施文されていることが顕著である。二段の文様帯は美しい山形把手によって構成される上段と、楕円文によって区画される下段とがよく調和し、地文に箆描の沈線文が配され、下段はとくに区画外にも充填し、沈線の細帯間には網目のように横に刻目文をほどこしている。胴部の縄文はビッシリと隙間なく回転施文されている。焼成は普通、色調は暗褐色、雲母、長石が混入している。

C. 第3群土器

本器形群は前者とは 異なる性格をもっている。即ちこのタイプは上体に文様帯の主体があることは変らないが、その文様に相似形の楕円文が見当らず、又口縁部から頸部に当るところに、かなり自由な文様を加飾してある。

(22) 挿図第10図、図版19の22

本器は深鉢型であり、出土状況は図版11のNo.21に見られる。大きさは、高さ23cm、底10cm、口径20.5cm、器厚は1cm平均である。焼成は焼きしまって非常に堅緻、雲母の混入が非常に多量である。器形は底が珍らしく末つぼまりで、外反、内曲する姿はまったく認められない。立上りから微妙に内彎し、本遺跡に一般的に見られる胴部と頸部の変化はあまりない。しかし文様は意識的に上体に集中し口縁には一方の端に山形の渦状の突起をつけ、そこから下へ引きのばされる隆起帯が山形となって把手をつくり、さらに隆帯が三角及び円文となって頸部をめぐり、縄文帯との境には隆起帯と半沈線文帯をめぐらせている。又、把手からさらに胴部に向って垂れ下がる隆起帯が一条ある。隆起の上にほどこしている沈刻文は、箆描で磨いたり刻み込んだりしており、刻み列もいわゆる爪形列刻の沈線文が見られる。下部の縄文は垂直に下げ、底部と思われるところが再び素文となっている。口縁の装飾帯の技法は、半研磨し、No.13の土器の製作技法に似通ったものがある。

(23) 挿図第10図、図版19の23

本器は深鉢形。完全ではないが、口径は22cmあり、現高は21.7cm、器厚は7mmである。焼成は赤褐色に焼上って非常に堅緻である。胴部に横に走る沈線文を界に繩文を施文し、口縁いっぱいに文様を集中させて、いわゆる第2群の特色の中にあるが、綺麗な山形の把手と、さらに獣か魚を形象化したような図文をあしらい、地文に箆描による沈線文が満たされているのは前者とはことなり、誠に調和した美しい土器である。隆起には刻目列と、半ば綾杉文化した沈刻文がよく駆使されている。なお胎土の中には長石が多い。

(24) 挿図第10図 図版19の24

本器は深鉢形であって、底部がや、欠損しているが、大きさは、現高36cm、口径23cm、底は約14cm 器厚は1cmである。器形は胴部が筒形であるのに対して、頸部から上が著しく膨隆し、口縁部全体に 彎曲が著しい。文様は口縁帯に集中している感があるが、四個の相対する把手(現在欠損して二個)が口唇の隆帯を引きのばして作られている。また、はりつけによる隆起の上に連続指頭痕を附加した 文様効果をもって、彎曲部に襷のように繞らせている。なお口唇部には隆帯の一部にボタン状の円文を附加している。胴部には第2・3群特有の繩文を施文しているが、しかし本器の場合は、割竹で引いたと思われる浅い沈線文が繩文地の上に引かれ、それが縦長の三角文を区画し、その内部を素文としている。技法的には微細に見ると繩文を磨消して無文としたものである。胎土の中には雲母、長石が多い。

(25) 挿図第10図、図版19の25

本器は深鉢形であって、上体を欠くので 詳細が分らないが、或はC群ではなくB群に入るかもしれない。器の大きさは現高約30cm、底14cm、器厚は平均1cmである。本器は文様が肩部以上に集中する姿は他と同じであるが、頸部の文様は隆起帯を円文として区劃し、隆帯の上には刻目列を附している。胴部は横にめぐる隆帯の下の沈線文を境に全面的に繩文で密に施文している。焼成は普通、褐色が強く、胎土には長石、雲母が見られる。

(26) 図版20の26

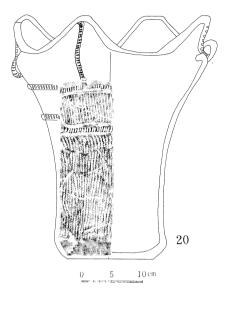
本器は部分であるので、詳細は不明であるが、技法的にはB群に属すると思える。或は(19)の破片かもしれない。技法、焼成、胎土が似ており、優美な土器片である。

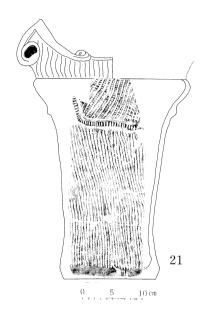
(27) 挿図第11図、図版20の27

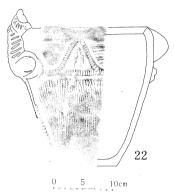
本器は底部のみであるが、底の大きさ12cm、現高20cmで、深鉢形であろう。この技法からいえば第2群A類(I4)に近似すると思われる。隆帯には交互沈刻文と刻目列を何段かに分けて附加しているが、便宜上ここに編入しておいた。

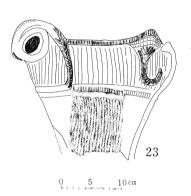
d. 第4群土器

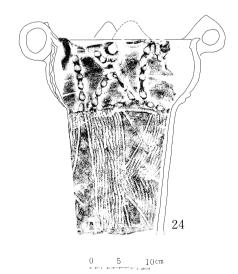
本群は、技法的に繩文帯を主体とし、口縁装飾も前出二群のように上体に加飾の主力を置かない土 器群である。器形は一見素朴であるが、しかし口縁の造り方は個体ごとにバラエティーに富んでおり













第 10 図

それぞれ、類別が可能なほどである。しかし一括してかかげた。

(28) 挿図第11図、図版20の28

本器は深鉢形の土器であって、出土状況は図版3のNo.6に見られる。器の大きさは高さ33cm、底10.4cm、口径20.7cmで、器厚は平均1cmである。焼成は普通で色は暗褐色を呈している。底部は末広がりの末端が「くの字」形にやや内彎する。胴部は立上りから外反して口縁は極端にふくらみを帯び、いわゆるキャリパー形に引きしめられる。口縁装飾はただ一個耳付の山形把手をつけ、隆帯には刻目文を附し、流末にわずかに突起を加飾する。器面は口唇から縄文を回転施文して僅かに底に素文をのこすのみである。胎土には長石の混入が多い。

(29) 挿図第11図、図版20の29

本器も深鉢形で、出土状況は、図版7のNo13に僅かに見られる。器の大きさは高さ29.5cm、底12cm 口径21cm、器厚は、平均9mmである。器形は28に近似するけれども、本器の方がやや細身である。彎曲する口縁はきれいに箆磨きした如くで、素文とし、唯一個の山形の把手を大きく装飾している。縄文帯は頸部から下で、底にさらに素文をのこす。回転施文された縄文は右傾左傾して不整な縄文であるが、他に加飾はまったくない。この器の胎土にも雲母の混入が多い。

(30) 挿図第11図、図版21の30

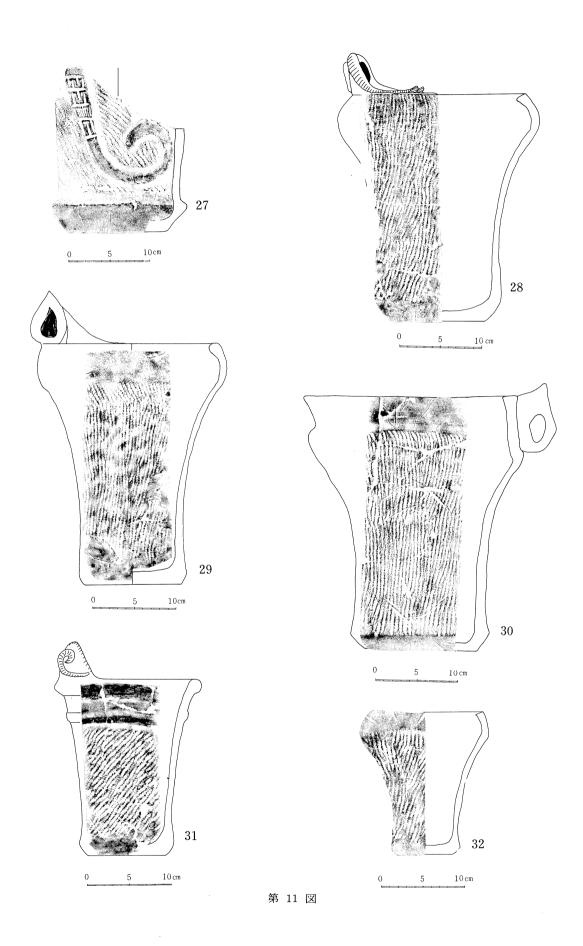
本器も深鉢形土器で、出土状況は図版7のNo.14に見られる。器の大きさは高さ31.5cm、底13cm、口径26.8cmで、器厚は1.2cmの平均が見られる。器形は頸部の彎曲するふくらみまでは(28)の器にまことによく似ているが、口縁が幅広の素文帯となり、立上りが外反して平縁という注目される形をしている。口縁装飾は素文帯の横に耳形把手として相対的につけているようである。縄文は頸部から下へ全面に回転施文され、明瞭に稜となっている底部の素文帯にまでいたっている。焼成は普通で、色は暗褐色を呈している。この器にも雲母、長石の混入が多い。

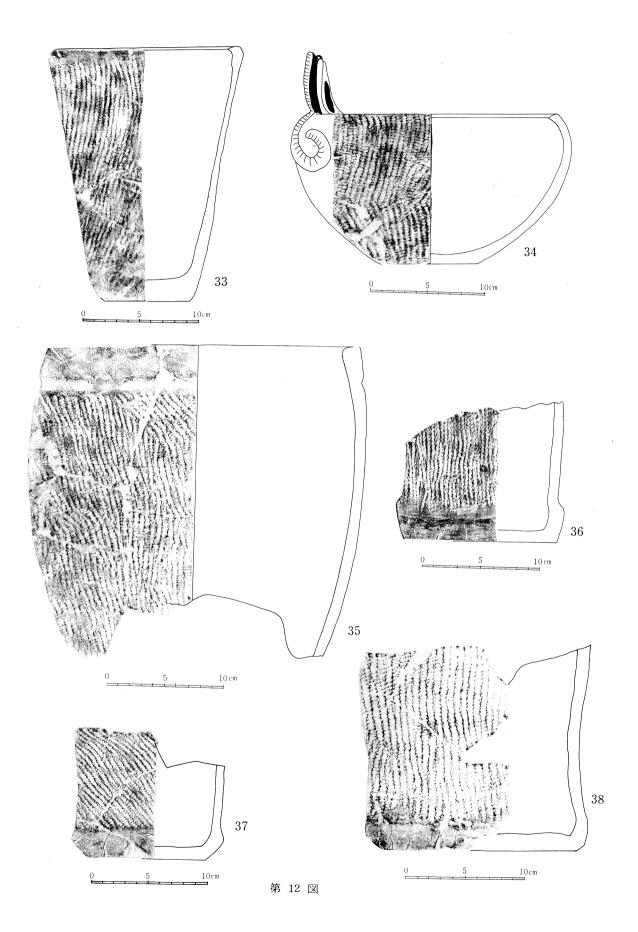
(31) 挿図第11図、図版21の31

本器も深鉢形で、出土状況は図版 8 のNo.15に見られる。ここには特に小さい器が割に上層に並らんでいた。器の大きさは、高さ21.5cm、底 9 cm、口径16.7cm、器厚平均 1 cmである。焼成は堅緻であり褐色を呈する。器形は底部はやはり末広がりにまとめ、内彎する素文帯でおわっている。立上りは漸時広がって口縁で扇形に開き、外反したまゝである。口縁には唯一個の山形突起をつけ、さらに隆起帯をはりつけ、刻目文で加飾している。口唇は玉縁づくりとし、胴部との接合部に凸帯を一条めぐらせて、そこまで全く素文にしているのである。縄文は左傾の施文で、底部を素文とする。胎土の中には長石が多い。

(32) 挿図第11図、図版21の32

本器も又深鉢形であって、出土状況は図版11のNo.21の炉のすぐかたわらに底部だけが出かかっている。器の大きさは高さ17.5cm、底 7 cm 口径13.5cm、器厚 8 mm平均で、小形の土器といえよう。焼成は堅緻であって暗褐色を呈している。器形は胴下部が引きしまって、底部が多少膨隆する形となり、立





上りは漸次外反して口造りは典型的なキャリパー形となっている。口縁は素文帯とし、箆で調整して磨き上げている。縄文は頸部から右傾左傾に回転して施文し、底部を再び素文としている。胎土には 微細の雲母、長石が見られる。

(33) 挿図第12図、図版21の33

本器も深鉢形の土器で、出土状況は図版6のNo.11に、(1)の大形甕に接触して発見されている。器形は高さ21.8cm、底7cm、口径16cm、器厚7mmである。焼成は普通で暗褐色を呈している。器形は底部は膨隆せずに締ったま、立上っており、そのま、外反し、口唇において僅かに内彎する形をとる。全くの平縁で、口縁に僅かに素文のところをのこし、縄文がその直下から左傾に施文せられている。底部にも僅かに素文がのこされている。外面にはや、煤けたあとも見られ、胎土には長石の混入が著しい。

(34) 挿図第12図、図版22の34

本器は浅鉢形と呼ぶべきかと思われる。破片でばらばらになって散っていた。恐らく上層で子供に破片を持ち去られた組であろう。片面の半分ほどしかないが、大きさは高さ18.2cm(把手を含む) 身だけの高さは12.7cm、底部は8cm、口径20.5cmである。焼成は堅緻で暗褐色を呈している。器形は誠に優美な彎曲を成し、口唇は平縁であるが、一方の隅に山形の把手をつけ、隆起帯の両端をそれぞれ振分けて渦巻文としている。隆起帯の背には刻目列を加飾している。縄文は口唇から右傾、左傾させところによって羽状縄文となって見えるところもある。本竪穴内では誠に異色の器体であった。胎土には長石の混入が多い。

(35) 挿図第12図、図版22の35

本器は樽形土器と考えられるもので、下半分を欠くのでこれ以上の器形は不明であるが、現高29.5 cm、口径27cm、器厚は 9 mmの土器である。焼成はや、もろく、ザラザラしており、暗褐色を呈している。器形は胴部が著しく膨張し、従来の器にはまったく見られないタイプである。口縁は幅広の素文帯をのこし、その下に一条の沈線文を横にめぐらせてその他に装飾は全くない。縄文は沈線から下に右傾を主調として施文している。胎土には雲母、長石の混入が著しい。

(36)(37)(38) 挿図第12図、図版22の36~38

本器は深鉢形の土器で、底部のみであるが、第2群、および第3群に見られる下半分を繩文帯で施 文する土器である。焼成は堅緻で雲母の混入が見られる。

e. 第5群土器

本群は器体全体を素文を主調とした土器群である。ただし第2・3群の器体上部に文様帯の主力があるものが、いくらか影響して、本群の場合も頸部から上体に多少の把手、あるいは隆起帯による文様の加飾が見られる。器形的に深鉢形のA類と浅鉢形のB類に分けられる。

A 類

(39) 挿図第13図、図版23の39

本器は深鉢形に属する。出土状況は図版 4 のNo.7 ~ 8 に見られる。器の大きさは高さ34cm、底11.6 cm、口径27cm、器厚約1.2cmである。焼成は普通で、や、暗褐色が強い。底部の膨隆は全く見られず、立上りは外反して朝顔形である。口唇は平縁で、外曲やや膨隆して凸帯風となり、頸部にさらに一条隆起帯をめぐらせてその隆起には連続指頭痕を附加して文様としている。器面は箆で調整しており、輪積みなどの継ぎ目はまったくのこっていない。胎土には雲母、長石の混入が多い。

(40) 挿図第13図、図版23の40

本器もまた深鉢形で、器の大きさは高さ31cm、底11.6cm、口径28cm、器厚は1.2cm平均である。(39)よりもや、高さは低いが、口径などは本器の方が大きい。全般にはしかし(39)に非常に似通った器形である。焼成はややもろい感じで暗褐色を呈している。口唇は平縁で、底作りも膨隆していない。器の内部は非常に使用した感じでザラザラのところが多い。器外面に煤けたところも見られ、胎土内には長石の混入が多い。

(41) 挿図第13図、図版23の41

本器は深鉢形であって、大きさは高さ16.8cm、底 9 cm、口径14.8cm、器厚 1 cm平均である。焼成は 普通、暗褐色である。

器形は(33)に近似するも、本器は全く素文である。平縁であるが、一方にわずかに渦文のつく山形突起を加飾して把手文様としている。ただし隆帯には爪形文も刻目列もつけていない。胎土には雲母、長石の混入が見られる。

B類

(42) 挿図第13図、図版23の42

本器は浅鉢形に属する。器の大きさは高さ8.6cm、底5cm、口径16cmの非常に小形の器で、焼成は普通、やや灰褐色を呈している。口唇は平縁で、肩部のところに、はりつけによる隆帯を波形に一本めぐらせるのみである。

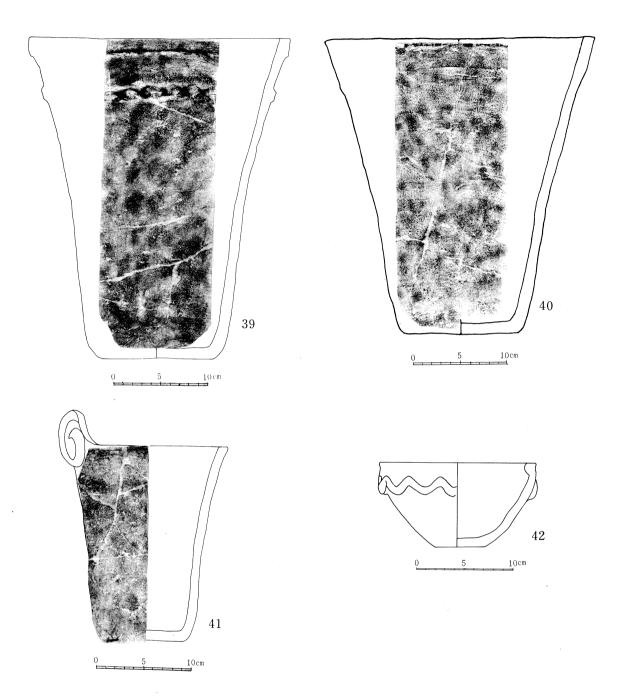
(43) 図版23の43

本器も浅鉢形土器で、出土状況は図版4のNo.8に見られる。器の大きさは高さ15cm、口径38cm、底11cm、器厚1cm平均で焼成は普通、灰褐色を呈している。器形は完全に浅鉢スタイルであって、底は小さく、その底から胴部へかけて急激にひろがり、口縁部に至って立上るが、口唇部と頸部との接合点に横に二条隆帯がめぐっており、その間に上下を結ぶ隆帯をもって区画窓を相対的に附加し、その内部は縦位の箆描による沈線文を配し、隆帯には又列刻の沈刻文をところどころに附している。その区画技法は第1群から見られるところで、胎土の中には著しい雲母と長石の混入が見られる。

附土器口縁と底部

(44)~(51) 図版24の44~51

(52)~(57) 図版24の52~57

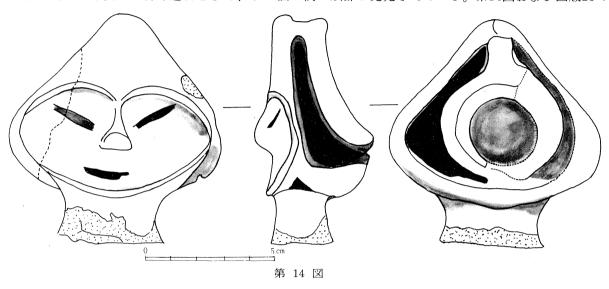


第 13 図

この土器片は本竪穴内にもっとも多く発見されたタイプであって、口縁装飾が多く、その技法の中には箆描による沈線文、交互沈刻文、刻目文、また連続指頭痕等の技法をもった土器装飾である。箆彫刻による雄大な器面加飾の土器片は全く見当らない。胎土にはやはり多量の雲母の混入が見られる。

f. 土偶 図版25の58~59

本竪穴内から出土の特殊遺物として、唯一個土偶の頭部が発見されている。第14図および図版25の



58~59がそれである。頸から以下を欠損しているが、現高 9 cm、面幅8.2cm、面深4.6cmあり、割に大形といえよう。出土状況は発見時に炉の北側で芦沢氏により掘り上げられてしまった中にあったので、残念ながら判らない。顔面は箆描による引目で、この種の先例は坂井(坂井遺跡報告書昭和39年)七日子(日下部町誌昭和27年)桂野(御坂町誌昭和46年) などに見られる。頸部の欠損部に胴部との接合を示す竹串の跡のような穿孔がある。又耳と思われる個所にも小孔を穿っている。頸部の接合から見て或は土器口縁の装飾、顔面把手の一種とも考えたが未詳である。

石 器 図版25

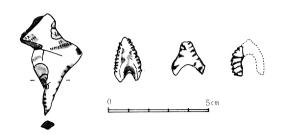
本竪穴内からは若干の打製石斧および、石錐、石鏃、装身具として珍らしく玦状耳飾が一個発見されている。

a 打製石斧

竪穴外のへりのようなところからと、土器片に混じで竪穴内から数本発見された。いずれも短ざく 形の打製石斧で、硬質の粘板岩を用いている。磨製の石斧は発見されなかった。

b.石 錐 図版25の60

炉のすぐ近く床面から発見された。大きさは長さ5cmあり、基部につまみとしての曲りがついている。材質は硅岩を用いている。



第 15 図 石錐及び石鏃

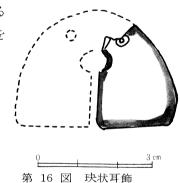
c石 鏃 図版25の61~63

黒曜石製の三個の石鏃が発見された。大きさは最大1.2cmであり、一個は三分一程に欠損している。 形は無茎で尾はいわゆる鍬形である。また二個は技法的に美事な有刺鏃であり、とくに注目されよう。 なお本竪穴内からは図版25の65~67の如く硅岩および水晶の原材料も少量であるが出土している。 とくに注目されるのは水晶で、塩山市内では玉宮地内に水晶の産地があり、縄文中期にすでにこの水 晶が原材料として注目されていたものであろう。

d 玦状耳飾 図版25の64

装身具として玦状耳飾の断片が一個発見されている。材料はいわゆる蛇紋岩であり、現高は2.7cm、幅2cmほどで板状に平たく、穿孔は精巧をきわめている。

本県からの発見は数少なく、近辺としては七日子遺跡(日下部町誌昭和 27年)に発見例が認められる。



6. まとめ

以上の如く本遺跡の遺物はフンド(一括遺物)として、誠に貴重であると思う。竪穴内の出土状況は床面約半分以上のものが確認できたのであるが、(遺物の項の出土状況不明のものは、声沢治朗氏が発見時に上げてしまったものの中に含まれていた。しかし復元の結果、その破片はほぼ完全に残されていたものと思われる。)なお竪穴は複合しない単純遺跡で、第2次の調査の結果、出土遺物は東西の周辺にはほとんど含まれておらず、図版No.2~3の如く竪穴内に集中して遺存していたものである。Aトレンチ、Bトレンチ内の土器片は小片がほんの微量検出されたばかりで、その土器片もきわだった他型式のものは認められなかった。従って竪穴は重川の氾濫原の中で、東西に伸びる長細い中洲のようなところに住居が設定されたものの如くであった。また土器片の遺存状況を見ると、重川の流路の氾濫と思われる礫石が床面の東北の隅に挿し出して来ていた。また土器群は上層のものは散乱状態となり、長く放置されていた様子を示していたが、下層の土器群の遺存状況は良好で全体の様子としては、毀れた土器をごみ捨場的に投げ捨てた感じではなかった。むしろ何か人為的要素が見られ、下層の土器はとくに完形品であったと思われる。

さらに注目されるのは、これらの遺物はフンドであると共に、土器の形態を分類してみて、たぶんにセット的要素が強いと思われた。

次にその点を列記してみたい。

土器全体の製作上の特色としては、半截竹管具と箆状施文具を主体として用いた土器群で、他に縄文の原体を水平において、口縁から底の方へ向って回転させて出来た技法の土器が多かった。また器外面を整形研磨し、なめらかな滑沢性を示す器の特色も見られる。焼成は一般に普通の焼きであるが胎土の中にいわゆる金雲母を多量に含むのは共通しており、さらに長石の混入も目立ち、一般的な砂粒の混入はさほど目立たなかった。ただ雲母・長石の混入の甚だしい土器は、焼成の過程の火の廻り具合の場所々々によって、意外に脆弱性を示しているところがあった。そのような箇所は、土器片を洗う過程において、水に溶けてボロボロになるものさえあった。

器形は一般に深鉢形を示す土器が圧倒的に多く、底部が膨隆して、「くの字」形に屈曲する器底の 形のものが各土器群とも傾向として多かった。

文様の面では、第1群土器を除き、土器の上体に文様の主力が集中する傾向が認められた。

文様構成は、第1群土器にそのほとんどの技法が駆使されている。まず隆線であるが、盛りあげた形に見えるものと、胎土の引き伸しによるものと、また半截竹管具による断面カマボコ形になる隆線が基調で、半截竹管具を使ったもの、中には、退化した半隆線、とくに帯が削られて低くなったものが見られる。盛りあげた形に見える隆線にはまた断面三角のものも見られる。これらの隆線を基調として、文様は、弧状、直線を描きさらに楕円、円形、三角形などの多様の区劃帯をモチーフとするものが多く、その背中に連続する爪形文、刻目文を付し、さらに交互沈刻文を加飾し、区劃帯内部には櫛状工具、もしくは箆状工具による平行沈線文を充填する場合が多い。沈線文は又、このほか図版16の(12)の如く連続の波状文を加飾したり、箆描の沈線文になっているものも認められる。(12)の土器は又、断面三角の隆線の両側に背位の連続爪形文が附されて注目される。

他の技法としてはY字型の沈刻文、列点文、弧状あるいは円形の刺突文があり、口縁装飾は彫刻技法による華やかなものはなく、口唇の隆帯を引きのばしてつくった山形、もしくは環状の把手、渦状

あるいはボタン状突起などによって加飾されている。また胴部を垂れ下がるはり付けの隆線は、下 部末端が右旋回、左旋回の渦状もしくは蕨状の文様構成をもっている。

これらの技法は、第2群土器においても口縁から頸部の加飾に濃厚に認められ、さらに胴部に垂下する隆線も、交互沈刻文や爪形文、刻目文の附加となって遺存する。第2群は又、胴部に繩文を地文としているが、これは第1群の図版15の(5)に遺存する。第3群土器の口縁の加飾は2群に共通し、さらに環状の把手、渦状突起、隆線背中の沈刻文、綾杉文化した沈刻文なども1群2群ともに見られる。さらに箆状器具による整形研磨の技法も、沈線文もともに類似性のものである。図版19の(24)の連続指頭痕の技法は第5群の(39)にも認められる。第4群土器は、地文となる繩文、および器形は23群に共通し、口縁装飾の把手の技法も同様である。第5群土器は素文を基調としながらも、隆帯の技法、把手の付け方、また意識的に口縁に文様を残す技法が、前者の土器群と類似し、(43)はことに長楕円文が1群から2群に顕著に見られる姿である。そしてなによりも胎土の雲母、長石の多量の混入は各群類似している。また繩文を地文とする土器群は色調が共通して暗褐色を呈し、さらに全般に焼きが甘く脆弱な感じがする。また4群5群には、とくに使用の擦痕が多く認められ、とくに器外面に煤が付着したものがある。

以上の結果を総合して、この土器群に具体的な編年位置を与えようとするならば、それは、中期中葉の広義の意味の勝坂式、阿玉台式土器に包含されよう。中部山岳地帯の編年をここで注目してみると、「平出」平出遺跡調査会の分類では、第五類に多くの類似が見られるが、なお一部に第四類に比定されるものもあり、さらに微細に見ると、文様区劃帯の構成のベースには、甲斐国を主体とする地方的要素が認められる。またそうした要素を加味して編年が行なわれた藤森栄一氏編の「井戸尻」中央公論美術出版によれば、この中の幾つかは、いわゆる藤内式 I、II式土器に近似した特徴を持っている。また関東的にいえば、図版16の(12)及び図版23の(42)(43)などは、技法的には阿玉台式土器にも対比できるものであり、さらに胎土、焼成方法の見地からいえば、胎土中に非常に多量の雲母(図版中にもそれが明らかに光って見える)あるいは長石の混入の多いのは、とくに注目すべきであろう。

このような結果、このフンドとしての一群の土器を、ティピカルな勝坂式土器群内に含めてしまうのは、いささか難があるように思われる。そのような意味で、この土器群は、甲斐国内のうち、とくに東部盆地の特色である中部山岳地帯と関東地方の接点にあたるファクタァ内のものとして、一応中期中葉の重郎原式と呼称してみたい。この点について先学諸賢の暖かい御示教が仰げるならば幸いである。

また本土器群に類似のものは、甲府盆地一円、とくに盆地縁辺部の台地上に濃厚な分布が見られ、 重川流域、日川流域、金川流域、および曾根丘陵方面にとくに多いと思われる。昭和46年3月~8月 発掘の中道町上野原遺跡においても、竪穴内から本遺跡と同様な出土状況をもった土器群が多量に出 土した。

7. あとがき

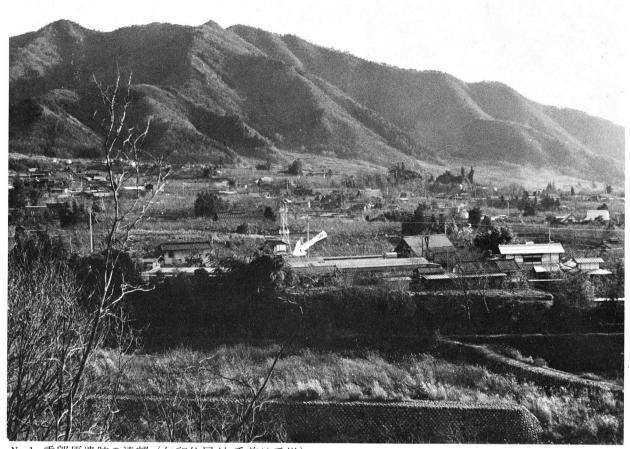
以上で、昭和37年6月~7月にかけて行なわれた重郎原遺跡の発掘報告を終るが、終りに当って発掘参加者及び復元実測に協力たまわった人々の名簿を記しておきたい。

発掘参加者

- ○山梨県立図書館郷土資料室 上野晴朗、清雲俊元、稲垣正幸
- 県社会教育課文化財係 伊藤祖孝、楡井竣一
- ○山梨郷土研究会 羽中田壮雄、野沢昌康、河内薫
- 芦沢家 芦沢治朗、芦沢欣吾、芦沢愛子
- ○土器復元 上野晴朗、芦沢愛子
- ○土器実測写真撮影協力者 森 和敏、折井忠義、萩原三男、早川方正 桜林芳秋、渡辺礼一、渡辺孝子、宮下敬子 一寸木和広

報告書執筆 上 野 晴 朗

版



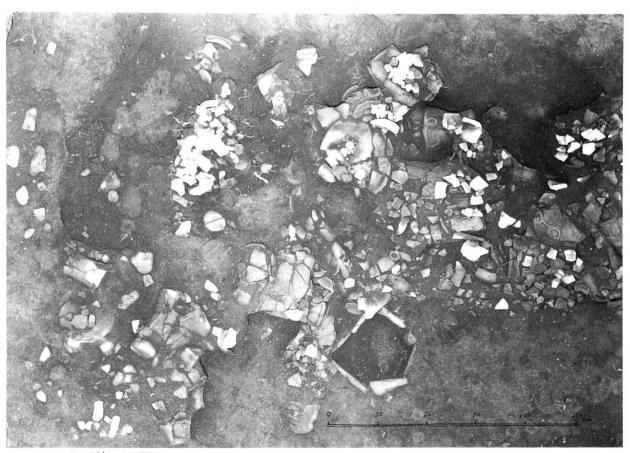
No.1 重郎原遺跡の遠望 (矢印住居址,手前は重川)



No. 2 竪穴住居址の全貌(最初に清掃したところ)



No.3 竪穴住居址の全貌 (左上は発見時に掘られて土器がない)



No.4 竪穴住居址の俯瞰図



No.5 上層の土器散乱状況



No.6 重なった土器の出土状況



No.7 累々と重なった土器群



No. 8 同上・部分拡大



No.9 壁面の検出と出土状況



No.10 上層の土器を上げたところ



No.11 炉のかたわらにも第一群の土器が横たわっていた



No. 12 同上・西側から見る



No.13 西壁近くの土器出土状況



No.14 東壁の検出と土器の出土状況



No.15 東壁上層の土器散乱状況



No. 16 同上拡大



No. 17 西壁の土器出土状況



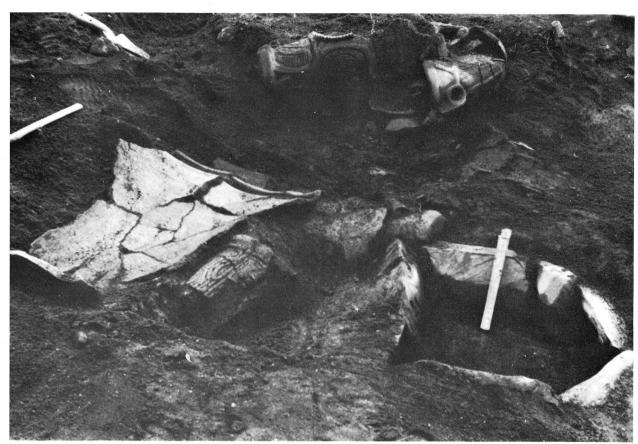
No. 18 床面近くの土器出土状況



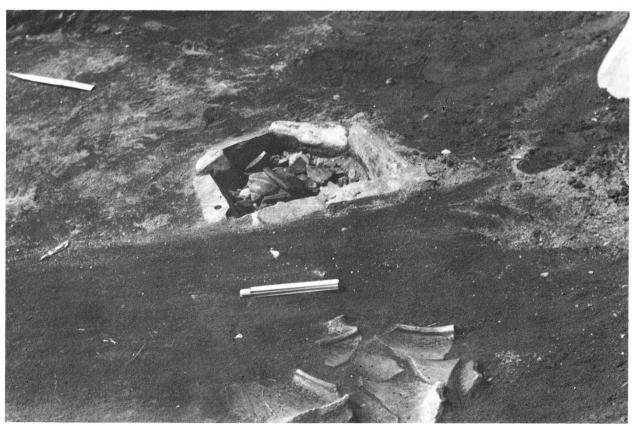
No. 19 床面直上の土器出土状況



No. 20 同上・出土状況



No. 21 床面の検出と土器の出土状況



No.22 同上・土器の出土状況



No. 23 床面の上に東北から礫石が押し出して来ていた



No. 24 礫石は花崗岩の風化が著しい



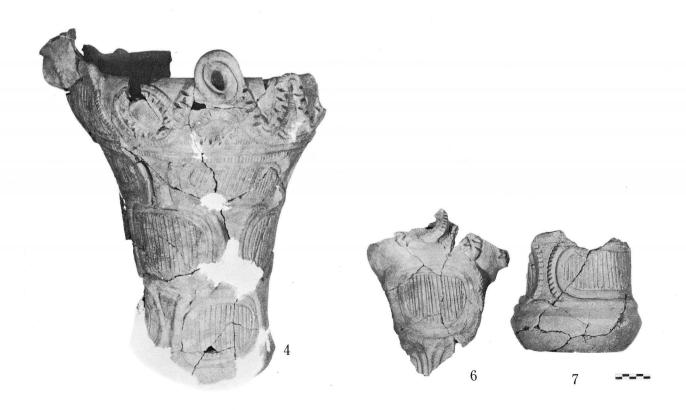
No. 25 竪穴内の礫石の様子 (床面上)



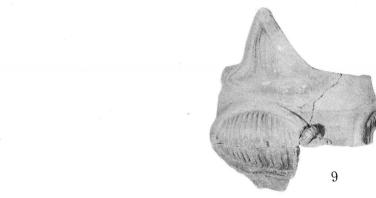
No. 26 掘り上げられた竪穴住居址





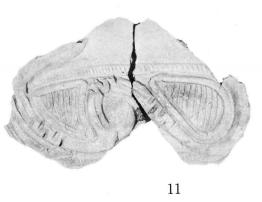








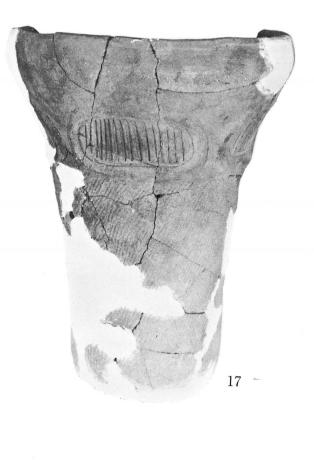








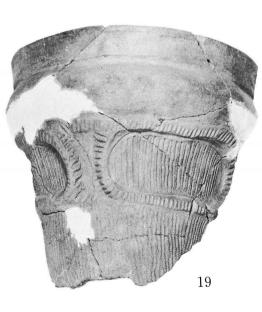


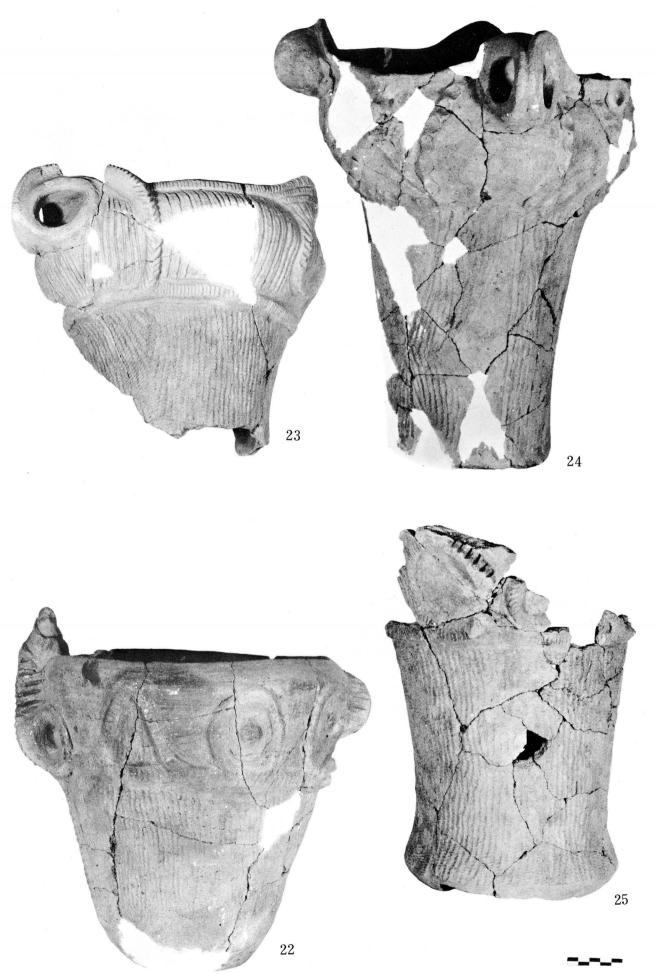


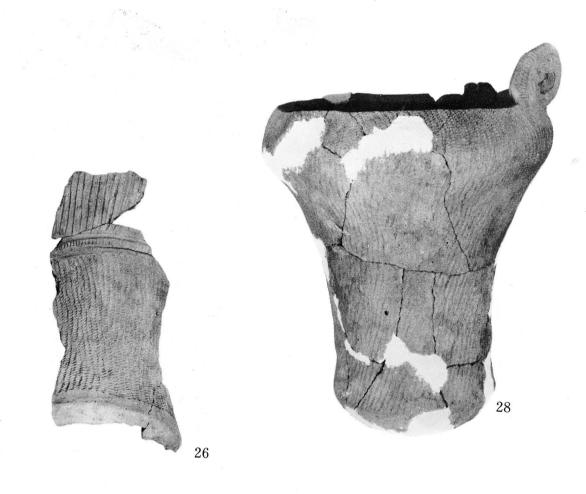










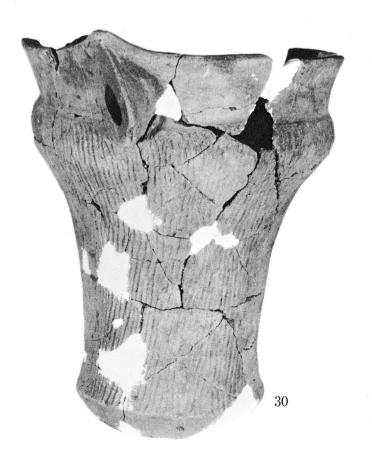




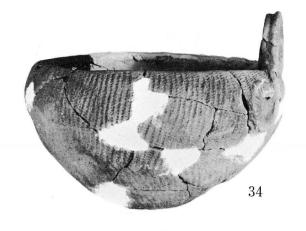
















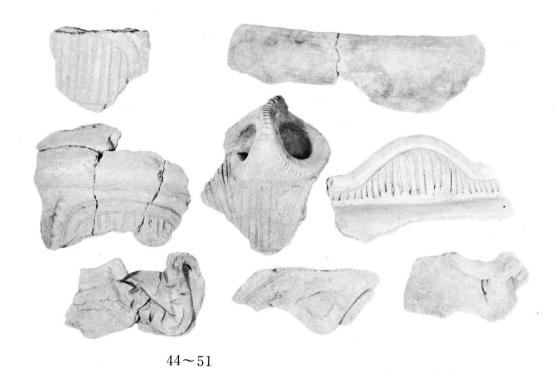


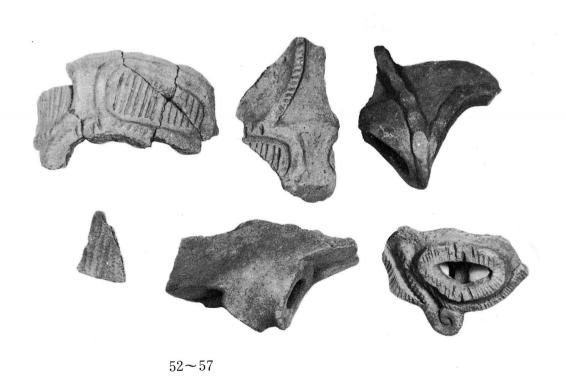














60~64



65~67

山梨県塩山市中萩原 **重郎原遺跡**

昭和47年3月10日発行

発 行 山梨県教育委員会

印 刷 株式会社サンニチ印刷

